バングラデシュ赤新月社　給水・衛生災害対応研修に研修スタッフとして参加して

医療技術部　臨床工学技術課係長　石原健志

平成 25 年 9 月 30 日から 10 月 10 日まで、バングラデシュ赤新月社が主催する表記研修に研修スタッフとして参加するために、バングラデシュのダッカに行ってきました。

給水・衛生災害対応研修とは、日本赤十字社がアジア大洋州地域で支援している給水・衛生での支援全般に関する研修で、バングラデシュ赤新月のスタッフ・ボランティアによって構成されるバングラデシュ国内の給水・衛生災害対応研修のことです。

日本赤十字社からは事務管理要員１人（本社国際部職員）、保健要員１人（日赤医療センター看護師）と私の合計 3 人が派遣されました。私の役割は、技術要員の立場から研修全体を通し、受講者に対して給水・衛生分野における技術面でのアドバイスを行うほか、日本赤十字社の支援でバングラデシュに配備される給水資機材を習熟してもらうというものでした。

当初この研修は８月に行われるはずでしたが、年明けに行われるバングラデシュ国内の総選挙の影響で治安が悪化し、現地で「ハルタル」と呼ばれるジェネラルストライキが続発したため、10 月の開催となりました。出発までの間、大使館、外務省や JICA などから現地の治安情報の収集を行いながら、本当に研修が開催されるのかヒヤヒヤしながら出国の日を迎えました。

バングラデシュのダッカ空港に到着し、無事に入国手続きを済ませ、一歩空港の外にでると、まずものすごい人混みに圧倒されました（面積は日本の約 4 割で、人口は約 1 億 5 千万人。1k ㎡あたりの人口密度は約 1,000 人だそうです）。ホテルまで向かう車中から見た状況ですが、道路は無法地帯と化しており、クラクションは四六時中鳴りっぱなしで、少しでも車間があると、右から左から車が割り込んで来て、車が渋滞で止まればすかさず物乞いが窓を叩きにやってくるといった感じでした。大阪で生まれ育った私でも、ここでは絶対に運転できないと確信しました。

研修は、ダッカから車で 3 時間程離れた郊外の研修施設で行われました。ここは静かで落ち着いた施設で、研修するには素晴らしい環境でした。研修受講者はバングラデシュ人 27 人（男性 24 人、女性 3 人）で、講義と演習は英語とベンガル語で行われました。研修は朝 8 時半から始まり、終わるのは毎日夜 9 時～10 時頃という長時間です。午前中は水の浄化方法、水質管理、給水装置のシステムや公衆衛生などの講義が行われ、午後は給水装置の組立と操作、トイレや手洗い場の設置、ジャーテスト、バケツテストと呼ばれる水質検査などを屋外演習で行いました。時に演習は雨中、夜遅くにも行われましたが大半の受講者は一生懸命作業しており、とても感心しました（文句はベンガル語で言っていたのかも？）。屋外演習終了後もスタッフはミーティングがあり、部屋に戻れるのは深夜 0 時頃といった毎日でした。ミーティングでは、各受講者評価や研修のフィードバックを行ったの

ですが、他のスタッフの評価やフィードバックは多角的で的確であり、私にとっても、大変勉強になりました。

研修中の食事は、ほぼ 100%カレー味で、主食は米飯、おかずは魚やチキンでした。私はフォークで食べていたのですが、受講者の多くは右手を上手に使ってご飯を丸め片手で食べていました（イスラムでは左手は不浄なので）。休憩時間には、必ずチャイを飲んでいました。

バングラデシュ人は非常に親日で、日本製の品質は皆が絶賛していました。今回、バングラデシュに配備される給水資機材にもホンダ製のポンプが使われています。また、街中で見かけた車はトヨタ、日産、三菱などそのほとんどは日本製で、日本の製品がバングラデシュ人に深く浸透している印象でした。

今後、洪水などの自然災害発災時に、今回配備された 2 機の給水資機材と研修で学んだ知識がバングラデシュの人々の支援につながればと思います。

BANGLADESH RED CRESCENT SOCIETY
BDRCS